



# 神戸薬科大学 薬用植物園 レター

## < Medicinal Botanical Garden Letter >

2024. 1. 19 発行 (Vol. 39)



### Vol. 39に寄せて

新しい年が始まりましたが、今年には地震、航空機事故と大変なスタートとなりました。犠牲となられた方々、被害に遭われた方々に、心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

植物園では今年もスタッフの大井氏手作りの門松を入口に飾っています。門松は豊作や幸せをもたらしてくれる年神様が来られる時の目印として、家の玄関などに飾るお正月飾りです。常緑の松や成長の早い竹などを使って作られます。1月中は飾っていますので、是非ご覧ください。さて、1~2月は開花している植物が少ない時期です。そこで、Vol.39では温室とその中で栽培している植物を紹介したいと思います。今回は、特にゲットウに焦点をあてました。

## 神戸薬科大学 薬用植物園の温室

### 温室について

薬用植物園入り口の東側には温室がある。この温室は2代目で、初代の温室は現5号館の西側付近にあったが、1992年に現在の場所に移設された。現温室の広さは建坪約164 m<sup>2</sup>で、大きな特徴としては、冷室を兼ね備えていることである。温室では本園が所在する場所では冬をしのぐことが困難な植物を、冷室では夏をしのぐことが困難な植物を栽培できるようになっている。さらに、室内の冷暖房設備はもとより、天窓の開閉、灌水などは全てマイコンによる自動制御が可能となっている。

### 温室の植物について

現在温室には、アフリカや中国などから集められた珍しい植物を含め、約250種を栽培・展示している。温室では、ゲットウ、ストロファンツ、イランイランノキ、バナナ、シナニッケイ、テリハザンショウなどを、冷室では、トリカブト、オウレン、バイカオウレン、レンゲショウマ、ウスバサイシンなどを栽培している。



温室内  
(この奥は冷室)

## 温室の植物：ゲットウ (ショウガ科)

和名：ゲットウ (月桃)  
 学名： *Alpinia zerumbet* (Persoon)  
 B. L. Burt et R. M. Smith  
 (= *A. speciosa* (Wendl.) K. Schum.)  
 薬用部：種子  
 生薬名：白手伊豆縮砂  
 (白手伊豆縮砂)  
 薬効・用途：芳香性健胃薬、香辛料  
 栽培場所：温室  
 開花時期：5~7月 (温室では4月~)



### ゲットウについて

ゲットウは、九州南部の大隅半島から沖縄の海岸に近い山野に自生し、台湾、インド、マレーシアまで分布する大型の常緑多年草である。沖縄県ではサンニン、サニンなどとも呼ばれる。土中では地下茎が横に這い、地上に偽茎を伸ばして成長するが、その高さは2~3 mほどになる。葉は長さが50 cmほどで楕円状披針形、紙質で光沢があり2列に互生する。葉の付け根が鞘状となって茎を包む葉鞘(ようしょう)を持ち、この葉鞘が1枚1枚折り重なって茎に見えることから、偽茎と呼ばれている。花期には、大型の総状花序を下垂し、多数の花をつける。小さい貝殻様の白いつぼみが開花すると、中は黄色で中心にはオレンジ色のしま模様があり、これは蜜標と考えられている。受粉すると子房が膨らみ実をつけ、成熟すると赤く色づく。

### ゲットウの利用について

ゲットウの種子は白手伊豆縮砂と呼ばれ、粉末にして芳香性健胃薬や香辛料として用いられる。伊豆縮砂は、縮砂(*Amomum xanthioides*の種子の塊)の代用品として用いられ日本薬局方第七改正に収載されていたこともある。伊豆縮砂は一般にハナミョウガ(*Alpinia japonica*)を基原とするもので特に黒手伊豆縮砂と呼ばれたが、これに対しゲットウを基原とするものは白手伊豆縮砂と呼ばれ、両者は区別されていた。また、ゲットウは毒虫に刺された際、根茎から得られる液汁を患部につけるなど外用としても利用されていた。

現在、ゲットウは様々な部位が健康茶として広く利用されるほか、葉鞘や葉から採れる繊維は、製紙の原料や、かりゆし(伝統衣装)の材料にも用いられている。また、葉には芳香があり抗菌や防虫効果があるとされ、食品を包んだり料理の飾り付けに用いられる。沖縄では、ゲットウの葉で餅を包み蒸したものを「ムーチー\*」と呼び食される。

\*ムーチーに関しては、裏面のMEMOをご覧ください。



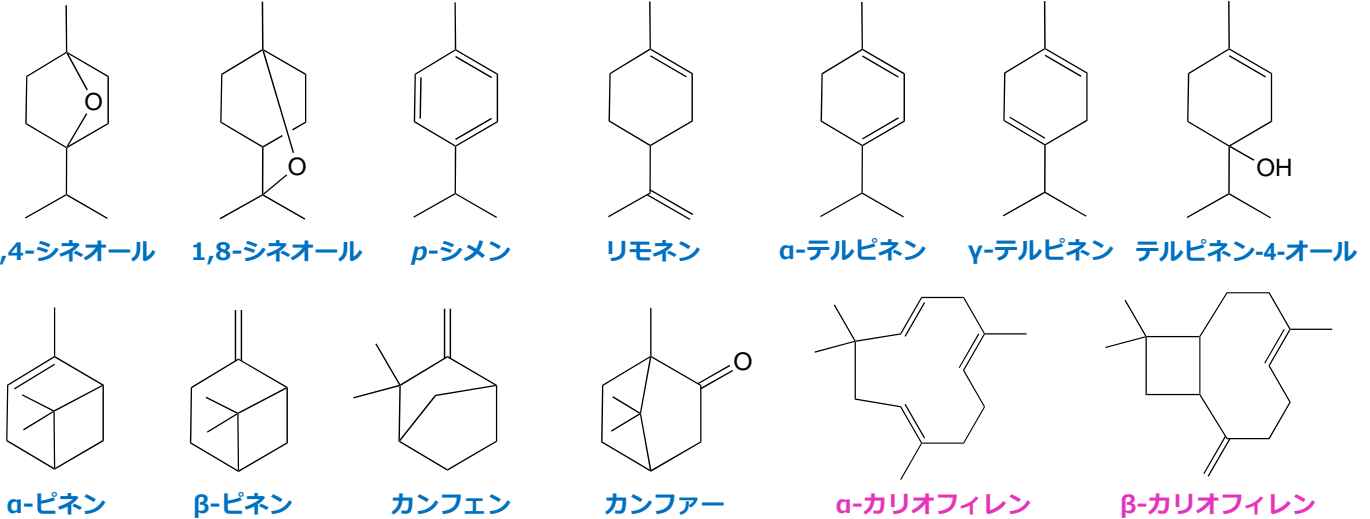
# ステップアップ講座（ゲットウの成分、温室で栽培している植物について）

## ゲットウの成分

ゲットウの種子や葉には芳香があり、多くの精油成分\*が報告されている。精油は、植物の生育地、採集時期、抽出法などによって成分の種類やその含有量が変わってくるが、ここでは主な成分として報告されている化合物を紹介する。精油成分としては、モノテルペン類が多く報告されている。また、種子にはパルミチン酸、葉にはポフェノール類も報告されている。

\*精油とは、植物などに含まれる揮発性の油状物質のことで、成分の分子量は小さく特異な芳香をもつものが多い。

### ゲットウの精油成分（モノテルペン：炭素数10個の化合物、セスキテルペン：炭素数15個の化合物）



## 温室で栽培している植物

**ストロファンツス** →  
(*Strophanthus* spp.) ↓  
(キョウチクトウ科)  
強心配糖体を含む有毒植物。  
種子を生薬として利用。本園  
の2種は花びらの先がひも状  
に長く垂れるのが特徴。



**イランイランノキ**  
(*Cananga odorata*) ↑  
(バンレイシ科)  
リボン状の花びらを持つ花か  
ら得られたアロマオイルは、  
リナロールを多く含み、香水  
やアロマの原料として利用。

**バナナ** (*Musa X paradisiaca*)  
(バショウ科) →  
木に見えるが草本である。果実を  
食用とする以外に、根茎や葉など  
を生薬として利用。

**バイカオウレン** (冷室栽培)  
(*Coptis quinquefolia*) ↓  
(キンポウゲ科)  
ウメに似た白い花を咲かせるオウ  
レンの仲間。牧野富太郎博士の母  
が好きだった花として有名。



## MEMO：ムーチーについて

ムーチーはゲットウの葉で包んで蒸した餅のことで、旧暦の12月8日には、これを厄払いのために神仏に供え、家族の健康を祈願する年中行事がある。ムーチーは鬼餅とも呼ばれるが、これは民話に基づいており様々な説がある。「両親を早くに亡くした兄妹は仲良く暮らしていたが、妹が嫁いだ後、兄は寂しさからか鬼と化してしまった。苦渋の決断の末、妹は兄の好きだった餅に鉄を入れて作って食べさせ、餅を噛み切れずに苦戦している隙に兄を殺めた。」と伝えられている話がある。

## 春の七草について

「せり なずな ごぎょう はこべら ほとけのざ すずな すずしろ これぞ七草」という歌があります。これは南北朝時代の学者 四辻善成が詠んだとされていますが、はっきりしたことは不明です。七草がゆは、この春の七草を用い、1年の無病息災と五穀豊穡を祈り邪気払いのために食べるとされています。

せり、なずなは歌の通りですが、ごぎょうはノハコグサ、はこべらはハコベ、ほとけのざはコオニタビラコ、すずなはカブ、すずしろはダイコンのことです。(2月初めくらいまで、植物園で展示しています)



## 編集後記

冬のこの時期、花をつける植物は少なく、植物園を訪れる人も少ないです。圃場は植物の植え替えや土作りを行っていることもあり、一般の方の見学会も行っていないです。それでも、スイセンや多くのツバキが見頃となりますのでお越しいただいて、是非、温室も見学してください。温室に入る際には、スタッフに一声かけていただくとありがたいです。

神戸薬科大学 薬用植物園

園長 小山 豊 (薬理学研究室 教授)

西山由美 (文責)、平野亜津沙、大井隆博

E-mail : [nisiyama@kobepharmaceutical-u.ac.jp](mailto:nisiyama@kobepharmaceutical-u.ac.jp)

協力 竹仲由希子 (総合教育研究センター)

